





# 1 ライオン

アフリカで、400万年前の足跡の化石が発見された。大きい足跡と小さい足跡がならんでつづいていく。どんな動物が残ったのだろうか？それは太古の人間の親子の足跡だった。何かから身を守るように、ひたひたよりそう二人の姿が見えてくる。では、大昔の親子は何をそんなに恐れていたのだろうか？それはライオンだ。

ライオンは昔のヨーロッパにも住んでいたが、人間が勢力を拡大するにつれて生息地がへり、今ではアフリカとインドにしかない。

ライオンは「プライド」という群れで暮らす。メスが協力して狩りをし、子育てもする。

最初の人間が直立二足歩行をはじめたとき、アフリカにはたくさんのライオンが住んでいた。ライオンこそ世界の支配者だった。ライオンは動物を襲って食べる。人間はライオンの獲物の一つにすぎなかった。ライオンにおびえながら、人間は暮らしていたのだ。やがて、長い時間がすぎて銃が発明されると、人間は娯楽としてライオンを狩るようになった。ところが、1960年代、自分たちが環境を破壊し、ほかの動物を苦しめていることに人間は気づいた。こうして、自然を保護しよう、野生生物を守ろうという新しい考えが生まれたのだ。

このころ、アフリカに暮らすジョイ・アダムソン（1910-1980）は、エルザと名づけたメスのライオンをペットとして飼いはじめた。飼育記録『野生のエルザ』は映画化され、世界中で大ヒットした。けれど、エルザがうんだオスの子は、人になれていたのに、人間を襲って殺してしまった。野生動物との共存はそんなに単純ではなかったのだ。

インドでは狩りや開発で絶滅寸前まで数をへらしたが、ギル森林保護区で保護されて、300頭に回復した。

ロンドンのトラファルガー広場には、英雄ネルソン提督（1758-1805）の記念柱がある。足元で護衛するのは、ライオンの銅像だ。



アフリカでは推定2万頭がおもに国立公園や自然保護区で暮らす。国際自然保護連合作成の「絶滅のおそれのある野生生物のリスト」（通称「レッドデータブック」）では、絶滅危惧種に分類されている。

130年前、ケニアからウガンダまでの鉄道建設工事中の2年間で、135人がライオン2頭に食い殺された。

ライオンはしばしば文学にえがかれ、C・S・ルイス作『ナルニア国物語』では偉大な王アスランとして登場する。

オスは群れと縄張りを守る。オスだけがたてがみもち、色が濃く、量が多いほど強いオスとみなされる。その姿から、ライオンは「百獣の王」とあがめられてきた。

ライオンは、イングランド、スコットランド、カナダ、ケニアなど多くの地域や国の紋章に使われている。





# ペンギン

世界で一番人気のある鳥は？ と聞かれたら、たいていの人はペンギン！ と答えるだろう。

19世紀半ば、動物園にデビューしたとたん、人間はペンギンのとりこにされてしまった。水族館でも、ペンギンはいつも人気者だ。

よちよちとあぶなっかしく歩く姿がとてもおもしろい。

だけど、いざ海へ飛びこめば、水中ロケットのように高速で華麗に泳ぎまわる。

2005年のドキュメンタリー映画『皇帝ペンギン』は世界的大ヒットになった。一番寒い冬に繁殖し、短い夏に子を巣立ちさせるペンギンの子育てに、みんなが感動した。

18種いて、南半球に生息する。最大のコウテイペンギンは水深565mまでもぐり、20分間潜水できる。

空は飛べないが、海中ではヒレのような翼をはばたいて、時速11kmで潜水遊泳する。



コウテイペンギンは、マイナス40℃の南極大陸で繁殖する。卵をうんだメスは120km先の海まで歩きヒナのために魚をとる。その間、オスは2か月以上絶食して抱卵する。



多くの種が生息数をへらし、5種は絶滅危惧種となっている。

ペンギンをモチーフにしたキャラクターは世の中にたくさんある。1935年には、難しい本に親しみをもってもらおうと、会社名を「ペンギン・ブックス」とした出版社がイギリスにうまれた。



94

# コウノトリ

コウノトリは赤ちゃんを運んでくる鳥として有名だ。毎年春、ヨーロッパにコウノトリが飛んできて、人家や教会の屋根に大きな巣を作る。コウノトリが住みついた家には幸せが訪れる、ともいわれる。でも、冬になるまえにコウノトリはいなくなる。どこへ行くのだろう？

1822年の春、ドイツにあらわれたコウノトリの首には矢が刺さっていた。その矢はアフリカで射られたものだった。コウノトリはアフリカで越冬していたのだ。こうして、鳥の渡りの調査がはじまった。

初期のグライダーは、はばたかずに長く滑空できるコウノトリをモデルにしていた。

19種いて、魚、カエル、昆虫、ネズミのような小動物を食べる。

日本では一度絶滅したが人工繁殖により2020年、野外個体は200羽になった。



最大のコウノトリはアフリカに住むフリカハゲコウで、翼のさしわたしが3.7mになるものもいる。

95

# カキ

人間はずっと昔からカキを食べていた。貝だから取りやすく、しかも栄養たっぷりだ。

ある時、カキの中からつやつやした丸いものが出てきた。真珠だ。カキには内部に入りこんだ異物を、真珠層でおおう習性がある。

天然の真珠はとても高く売れるが、まれにしか見つからない。そこで、真珠の養殖がはじまった。

近縁のアコヤガイに球状の核を入れると、数カ月後には真珠ができています。

カキが群れになって海底に作るカキ礁は、波の勢いを弱めて海辺の町を守り、水中生物の安全なすみかにもなる。

日本には、女性が素潜りして、カキやアコヤガイ、アワビやサザエ、コンブなどをとる海女漁という伝統的な漁法がある。



カキは周囲の水をきれいにする。毎日、数百ℓの水をろ過する。